図書だより

第４７号
平成２０年２月１日
呉工業高等専門学校
図書委員会
http://wwwlib.kure-nct.ac.jp/

海上自衛隊呉史料館「てつのくじら館」*

目　次

・ **巻頭文**　宮沢賢治のことなど思いつくまま …… 校　長　遠藤 一太　2
・ **第４回　校内読書感想文コンクール優秀賞**
『4TEEN』（石田 衣良 著） …… E1　矢野 裕和　3
『ハックルベリィ・フィンの冒険』（マーク・トウェイン 著） …… A1　末重 麻衣　4
『下流志向』（内田 樹 著） …… C3　島　千秋　5
『「オトコイの予習」』（山田 詠美 著）…… C4　増金　愛　6
・ **留学生が紹介する外国の図書館** …… E3　ムンクバット　7
A3　グレゴリー　7
・ **ブックハンティング**　ブックハンティングについて …… A4　中本 竜幸　8
・ **行事報告**　第５回呉高専文化セミナー …… 図書館長補　岩根 三邦　8
・ **新任教員の随想**
骨身に沁みる読書のすすめ …… 一般科目（英語）　栗原 武士　9
多読のすすめ …… 一般科目（英語）　竹山 友子　10
読書のすすめ …… 一般科目（英語）　西原 貴之　11
就職面接も読書から？ …… 環境都市工学科　及川 栄作　12
ヒロシマをさがそう …… 建築学科　八木 雅夫　13
・ **DVD の活用について** …… 機械工学科（図書館長）　野原　稔　14
・ **お知らせ** …… 16
・ **編集後記** …… 図 書 館　16

* 退役潜水艦を陸上展示する海上自衛隊呉史料館「てつのくじら館」が、平成 19 年 4 月 5 日呉市に誕生した。展示される潜水艦「あきしお」は、1986 年の就役から 2004 年 3 月まで現役で活躍し、その大きさは、全長 76m、高さ 16m、幅 9.9m、重さ 2,250 ton である。また、実際の機器を備えた発令所、士官寝室や生活スペースなどの見学をすることができる。

巻頭文

宮沢賢治のことなど思いつくまま

校長　遠藤 一太

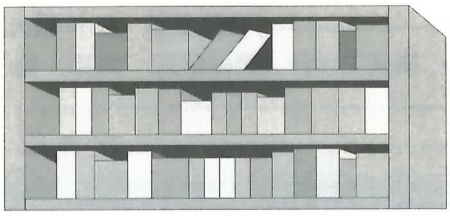
昭和30年頃、狭い我が家は本で埋まっていた。小学生の私は、手当たり次第に何でも読んだ。何冊かあった宮沢賢治の作品集も全て読んだ。「グスコーブドリの伝記」とか「銀河鉄道の夜」とか。話の内容は覚えていないが、この本のことを思い出すと、今でも何かよくわからない不思議な感覚に包まれる。

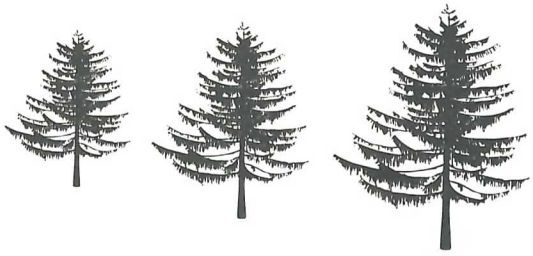
私は近眼と読書癖を親から受け継いだ。それがまた娘へ孫へと伝わっているようだ。沖縄に住んでいる孫たちはしょっちゅう「いつまでも本を読むな。本は逃げないから。」と叱られている。どこかで聞いたようなせりふである。

さっき書いた「グスコーブドリの伝記」の内容を調べてみようと思いたってインターネットで検索してみた。何と、全文が読めるではないか。陰鬱な話という印象を持っていたのだが今読んでみるとどうも違う。暗い状況をあっけらかんと記述し、カラ元気とも思える希望的展開の内容であった。でも、実は子供のときに受けた印象のほうが作者の意図に沿っているのかもしれない。それとも、年齢差の問題ではなく、コンピュータ画面と印刷体から受ける印象の違いなのだろうか。

今朝、呉高専図書館に行って初めて本を借りた。「新編風の又三郎」宮沢賢治作（新潮文庫）である。読んでみたが「グスコーブドリの伝記」の印象は、先日のWEB版と変わらない。結局、子供の時に受けた印象と今の違いは、主人公への感情移入の度合が下がり、また、現在の自分は賢治の科学技術への期待を受け止めるべき立場にあるという事情に関係しているようだ。飢饉対策として火山を人工的に爆発させて空気中炭酸ガス濃度を増加させ、気温上昇を図るという結末には複雑な思いがよぎる。

さて、新米の校長として本校の図書館について考えてみた。蔵書冊数は結構多いがスペースが狭いため開架本が少ない、また、電子図書やDVDを見る設備とスペースを増やしたいという要求がある。どうすれば拡張できるだろうか。既存の建物を単純に拡充するための予算獲得は極めて難しい。しかし、夢を持ちたい。野原図書館長と一緒に見廻りながらこんな話を交わした。「単なる図書閲覧だけでなくマルチメディア教材利用やe-learningの場、異文化交流の場、地域交流の場、芸術作品や研究成果の展示などのさまざまな機能をもつ新時代の図書館として生まれ変わる。そして、一階のラウンジとの一体感を保った文化の香りあふれるスペースとしたいものだ。」





第４回　校内読書感想文コンクール優秀賞

１年生の部

４ＴＥＥＮ（第129回 直木賞）

石田 衣良　著

電気情報工学科１年
矢野 裕和

私は高専一年生の十六歳。すなわち、まだ成人を迎えていない子供である。大人の仲間には入れてもらえない。かといって、「子供だから」という言い訳を使うこともできない。中・高生というのは、大人と子供の境目という一番厄介な年頃なのだ。

この本に登場する四人の少年達も、十四歳という「大人ではないけれど子供でもない」難しい年頃を迎えている。そんな彼らが必死に大人の世界（主に性的なこと）を覗こうとする姿がとても印象的な作品だ。

私も彼らと同様、大人というものに興味がある。特に、中学一年生の頃は、小学生から中学生になって、なんだか急に大人になったような気がしていたためか、飲酒や喫煙、性的なことなど、何か大人の行動に興味を持ち始めたのを覚えている。初めて一人暮らしに憧れて、してみたいと思ったのもたぶんこの頃だ。とにかく早く大人になりたい。大人になっていろいろなことを体験してみたいと思っていた。

しかし、三年たった今は考え方が変わってきている。結論から言うと、今はまだ大人にはなりたくない。なりたくないというより、まだ大人になる力も自信もないのだ。昔は二十歳になることが大人になることだと思っていた。だが、それは一つの要素に過ぎないと最近思うようになってきた。自分の行動に責任が持てること、自分の力で生きていけることなど、もっと重要な要素があると思うからだ。これらのことは、今の私にはまだできていない。たとえ年齢が二十歳を過ぎていても、これらのことができていないうちは、本当の意味での大人とは言えないと、私は思うのだ。

考えが変わった理由はもう一つある。十代の今しかできないことが、大人にしかできないことと同じくらいたくさんあると思うようになったからだ。自分の将来のために毎日勉強すること、友人と毎日会えること、趣味や自分が興味のあることに時間をかけることも今しかできない。また、私の母は以前、「高校生の頃が一番楽しかった」と話していた。理由は今よりも自由が多かったからだそうだ。これには少し驚いた。私はこれまで、大人はお金もあるし、親や周囲の大人に管理もされていないので、学生よりは格段に自由だと思っていた。しかし、実際は社会に出てからの方が何倍も大変で、なかなか自由な時間などないと知った。家庭を持つとなおさらしい。大人というのは私が思っていたほど自由ではなく、もっと大変なものだったのだ。決して楽なものではなかったのだ。だから軽々しく「早く大人になりたい」と言うべきではないのかもしれない。

私は十六歳。まだ大人ではない。しかし四年後に自分が二十歳になったときには、自信を持って、「私は大人だ」と言えるようになっていたい。逆に言えば、今、変に大人ぶる必要もないのだということだ。ゆっくり、自分のペースで成長していけばいいと思う。

残り四年の十代を、十代らしく生きていこうと、私は決意した。

ハックルベリィ・フィンの冒険

マーク・トウェイン著

建築学科２年
末重 麻衣

自由ということば。なんて都合のよいことばだ。口にするのも書くのも簡単だ。だから小学生のとき、夏休みの計画表にはよく「自由時間」と書いた気がする。勉強もせず、自分のやりたいことを思いきりすることができる時間。

しかし、黒人にこの時間はなかった。自分のやりたくないことを奴隷として無理やりやらされていた。差別からの自由を求めた黒人の心の底からの思いをこの本で知った。

これは少年ながら奴隷制度に反対だった白人の主人公ハックルベリィが、心を通わす黒人奴隷のジムを自由の身にするために冒険にでるという話である。

「僕は神は二人いるのだと判断した。」という文章がある。これにははっとさせられた。確かにそうだ。良い神様と悪い神様がいて私たちを見守っている。わざわいか幸せのどちらかのストーリーを提供し、どんな人間であるのかを雲の上から楽しんでいるのだ。世の中は不公平なものだ。黒人は不幸な生活をしてきた。同じ人間なのに。

また、こんな文章もある。流れ星をみて、「あれは腐ったので巣から放っぽり出されたのだ。」と。なんて悲しい差別を表した表現だろうか。なぜ差別されなくてはならないのか。腹立たしい気持ちになったが、自分自身も差別している側の人間かもしれないと恐ろしくなった。

「差別しよう。」という気持ちはないのに「あれは黒人だ。」と言ってしまったり、なんとなく意識してしまっている自分がいた。私の頭の隅には差別ということばがあるのかもしれない。悲しくなった。なさけなくなった。人間というものはお互い他人に対してひどく残酷なことができるものだ。この世から差別がなくなればよいと心から願った。

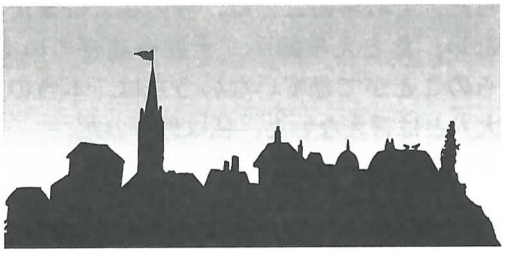
最近、大阪で行われた世界陸上。表彰台を独占している黒人の姿。強靭な筋肉、心肺能力の高さ、恵まれた体格。陸上競技に適している黒人の体は日本人にとってうらやましい。だから私は尊敬している。

だが、それを理由に差別がうまれた。それは、駅伝で一区に外国人を起用することの禁止である。「留学生効果」で勝負が決まってしまうからだ。これはおかしい。外国人だからといって区別はできない。同じ高校生同士、正々堂々と勝負するべきなのだ。そんなことから日本人が速く走る機会を失っているんだ。

人間としての権利・自由が認められなかった。人間が簡単に売買された。人々は悲しみ、屈辱を受けた。いまだ根強く残る差別。でもこれだけは忘れてはならない。国籍や人種が違っても同じ空の下で生きているということ。決して、ものや道具ではないこと。白人や私たちのように心の中の思いは同じだということ。人間は欲望だけで生きている。豊かさを知った人間のせいで差別がうまれてしまった。これは恐ろしいこと。本当の黒人差別がきえてなくなる日はくるのだろうか。いや、きっとくると信じている。一人ひとりの意識の問題だ。

今まで彼らが簡単に手に入れることができなかった自由。私にはすぐ自由がつかめる。だから、自由の大切さに気付かなかった。私は今、「差別」というプレートがかかった扉のドアを開けた。このあとどう進んでいくかは私自身。人間は自由があればいきいきと生きてゆける。

自由ということば。実は簡単に口にだすことのできない重みのあることばだったのだ。



下流志向

学ばない子どもたち　働かない若者たち

内田樹　著

環境都市工学科３年
島　千秋

今、我が国日本では子供達の学力低下が問題とされている。私は、学力低下最大の原因は「ゆとり教育」という政策のせいだと考えてきた。学校は週五日制になり、円周率は私の二つ下の子から「３」に、そしてしまいには台形の面積は「（上底＋下底）×高さ÷２」では教えず、分解して求めるようになってしまった。これでは学力は確実に低下してしまうに決まっている。そう、この本を読むまでは思っていた。しかし、気付いたのだ。学力低下を招いているのは決して政策のせいではなく、学ぶ側である私達自身のせいだったのである。

私達日本人学生の中で「学ぶ事が好き」と答える人は、いったいどのくらいいるだろうか。多分そうはいない。皆これから学ぶわけだからその事についての知識は無いはずだが、まず嫌悪する事から入る。それに比べ、世界各国の子供達が学校で勉強している姿を時々テレビで見るが、誰一人として嫌そうに授業をうけてはいない。この本のサブタイトルにもなっているが、日本の子供は学びから逃走しているのだ。そして、これが学力低下の一番の問題点になるのだ。

ではどうして日本人学生は学ぶことを拒むようになってしまったのだろうか。これは本を読み進めていくうちに、とても簡単に答えを見出すことができた。私達学生が、あまりにも早い段階で消費主体として自己を確立してしまったからである。

私はここで、自分を客観的に見てみることにした。そして驚いた。本にも書いてあったんだが、例えば「これを学んだら何の役に立つの」という疑問を私は抱く。これは言い換えると「これだけあなたの言った事をしたら、どれだけの見返りが貰えるの」という明らかに消費者的な考えから出てきた言葉で、なおかつ学ぶ事に意味がないと判断されたものは、買う価値がないもの、学ぶ価値のないものとして取り扱われているということなのである。始めの方にも言ったが、まだ学んでもいないにのに学ぶ価値がないと判断できるはずはないのだ。私は典型的にこの本で書かれている学ばない子供だったのだ。少し話は変わってしまうかもしれないが、私達の学校では、先生の評価表というものがある。私はあの制度は必要ではないと考える。師弟関係が崩れる大きな原因になってしまわないだろうか。どんな先生でも師には変わりなく、学生は先生を敬うべきだ。その授業がシラバス通りに行われていないとか、その先生は授業に熱心に行っているとか、学生が評価しなきゃいけないことだろうか。良い学びの場を作るどころか、学生は成り上がり、ますます学びから逃走するに違いない。

私はこれまでで、学びからの逃走についてを主に書いてきたが、この本ではここから労働から逃走する若者についてとくり広げられていく。しかし、言っている事は同じであって、私達が消費主体で物事を考えているかぎり上流社会にはほど遠い、下流志向な人間でしかないのだ。私は本を読み終えた時、自分の未来を見ているようでとても恐ろしい気持ちになった。下流志向な人間にはなりたくない。今からでも遅くないと信じて、生まれ変わりたいと思う。あの目をキラキラ輝かせて黒板を見つめている海外の学生のように、私はなりたい。

「オトコイ」の予習

山田 詠美　著　「無銭優雅」

環境都市工学科 ４年
増金　愛

誰かに読んで欲しい。そう感じた本は、どれも私の心に残っている。この本は、「未来の自分」に、是非読んでほしいと感じた。

冒頭から、みーみーと甘えた鳴き声が聞こえる。ただし、その声の主は、決して猫のような小動物ではない。四十を越えた、大人と呼ばれる生物である。そんな大人がどうしてこんな声で鳴くのかといえば、それは二人が「恋に落ちている」からである。二人は、結婚はしていない。あくまでも「恋人」である。この本では、そんな人生の後半の恋のことを、「オトコイ（大人の恋）」と呼ぶ。

恋に年齢は関係ないというのは、人類の合言葉なのかもしれない。私自身も、そうであってほしいと思っているし、そうでありたい。しかし、この本の中で「オトコイ」をしている慈雨と栄は四十五歳。この本を書いた作者は、私の母と同い年の四十八歳。そんなことを考えながら読むと、はっきり言って、複雑な気持ちになった。私の周りのこの年齢の人達は、果たしてこんな感じだろうか？恋は、自分たち以外の人や物のことなんて、すべてどうでもよくさせる。二人のための世界だと錯覚させる。主人公になりきった二人には怖いものなんてない。しかし、人生の後半になっても、二人でみーみー鳴くのだろうか。二人でとろとろくにゃくにゃじゃれるものなのだろうか。わからない。当たり前だ。私はまだ両手両足の指で足りるほどしか生きていないのだから。

慈雨の姪の登紀子が、男との口論で涙を流し、そのせいでマスカラが滲んでしまう場面がある。偶然そこに居合わせた慈雨が、「マスカラは、ウォータープルーフにしなくては」と声をかけるのだが、登紀子はこう返す。

「これ、シャネルのプードゥル　ア　シルだから。慈雨ちゃんの使ってるメイベリンとかと違うから」

そのとき私は思った。メイベリンだろうとシャネルだろうと関係ないのだ。それを悲しい涙で滲ませないように、と心を砕いてくれる男ならば。なんて言って、もしも強力なウォータープルーフのメイベリンまで滲んでしまったときは、

「彼はすっぴんが一番だって言ってたもの。こうなったら、ついでに全部落としてやる!!」

なんてかわいい言い訳を言わせてしまうような男が最高なのだ、と。

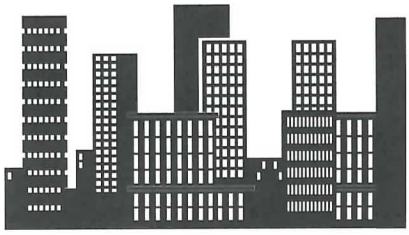
夏休み、一人暮らしをしている姉以外の家族が、リビングに揃う。そこで私は「オトコイ」を発見した。主人公はもちろん、私の父と母である。さすがにみーみーとは鳴いていなかったけれど、くだらないことを話して大笑いして、とても楽しそう。よく考えてみれば、それは日常的に我が家で繰り広げられてきたことだ。特別だとは思っていなかったけれど、これも「オトコイ」の一つだったのだ。

最近、姉が猫を飼いはじめた。家では、母が嫌がるので飼うことはできなかったが、私はずっと猫が飼いたかった。かつお節としっぽのおもちゃをお土産にして遊びに行くと、とびきりかわいい猫が二匹。おもちゃで心を掴み、一緒に仲良く遊んでいると、それを見て、姉が言った。

「愛、結婚せずにずっと猫と暮らしとったりしてー」

そうかもしれない……。かつお節としっぽのおもちゃを狙う二つの柔らかいものは、私を見上げてみーみー鳴いている。十年後、二十年後、私はこんな声で鳴きながら、「オトコイ」できているだろうか。予習はもう済ませた。あとは、長い年月の先、人生の後半で実践するときを待つだけだ。

（書名；無銭優雅、　出版社；幻冬舎）



留学生が紹介する外国の図書館１

電気情報工学科３年

ムンクバット

私の出身はモンゴルの首都ウランバートルから500ｋｍ離れたサインシャンドという小さい町である。この町には一つの図書館だけあるが、残念ながら、私はその図書館に入ったことがなかった。私があまり本を読んでいなかったからである。
大学に入学してから、初めて図書館を利用してみた。私はモンゴルの国立大学（National University of Mongolia）の図書館しか利用していなかった。今その図書館を紹介したいと思う。

国立大学にはいくつかの図書館がある。覚えているのは社会、理科、外国の図書に分かれていた。この中から理科の図書館によく行っていた。社会と理科の図書館はいつも学生で混んでいる。空いている椅子を見つけたら嬉しくなるほど学生が多い。その学生たちのほとんどの人が教科書を借りるために図書館に来ている。だから、皆の借りたがっている本は全然足りないので、友達やクラスメイトなどと一緒に一冊の教科書を使うことが普通である。モンゴルでは日本みたいに皆が教科書を買っていないから、このようなことがある。もう一つのほんとの違いはその一緒に勉強をしている学生たちがよく話すので、図書館はだいたい賑やかである。でも学生たちは図書館で楽しんで勉強をしているので、皆は図書館が大好きだった。

私が良く利用していた理科の図書館にはほとんど古い本ばかりだったが、理科の規則があまり変わらないので、私には十分だった。

私が日本に来て、特に呉高専に来て図書館というのはこんなものかと思った。そしてその思いを友達に話したら、友達によるとモンゴルにも最新の技術を使っている図書館もあるそうだ。だから、モンゴルという国の図書館すべて私の書いたとおりだと思わないでください。私の紹介した図書館のことを想像できない人がたくさん出るかもしれないが、それは仕方がないだろう。

留学生が紹介する外国の図書館２

建築学科３年

グレゴリー

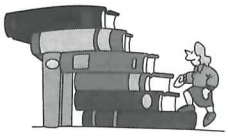
私はガボンから来ましたグレゴリーと言います。ガボンはアフリカ大陸中部西岸にあり、カメルーンやコンゴに隣接しています。私がガボンの首都リーブルヴィルで利用した図書館を紹介します。

まず、ガボンで最も利用した図書館は学校の図書館です。学校の図書館は、日曜日以外の午前８時から午後５時頃まで利用できます。図書館を利用する時は、まず登録しなければなりません。名前や教室や図書館に来た目的などについて登録します。そして、目的に応じて適切な本を探します。図書館は一つの広い閲覧室になっており、その閲覧室の壁に沿って本棚が並べられています。本棚には研究用の本や読書の本などが並んでいます。部屋の中央部分にたくさんのテーブルと椅子があり、そこで本を読みます。中央部分の広いスペースを利用して、映画を鑑賞したり、展示会が開催されることもあります。

学校の図書館以外では私用や公用の図書館があります。一番有名な図書館はサンテクジュペリ文化センターの私用図書館です。学生だけでなく一般の人々も利用できる図書館です。学校の図書館と違って広い閲覧室がたくさんあり、本の主題によって分類されています。本ばかりが高い本棚に並んでいる閲覧室もあります。この図書館を研究で利用している人は結構満足しているようです。そこにはインターネットも利用でき、かなり便利です。

私がガボンで利用した図書館を紹介しました。

ブックハンティングについて



文化委員長
建築学科４年
中本 竜幸

今回のブックハンティングは、広島市内にある『ジュンク堂』というところに行かせてもらいました。各クラスの代表者１名と文化委員長・文化副委員長の計２１名（１名欠席）で選びに行かせてもらったのですが、自分はクラスの代表というわけではなかったので、かなり個人的に興味があった建築の専門書ばかりを選ばさせてもらいました。

クラスごと、学年ごとでかなり選ぶ本にばらつきがあり、低学年は小説や雑誌系のもの、中には一人の作者の作品だけを何冊も選んでいる人もいました。それに対して、４・５年生になると専門書が多く、進学・就職を配慮しているなあと強く感じるものばかりでした。特に建築学科は、高学年になるにつれて普段買ったりすることのできない高額な専門書を選ぶ傾向が多いらしく、去年小説ばかりを探し回っていた自分は身を持ってそれを実感しました。

結果的に、ブックハンティングは楽しかったです。一人一人の上限額が結構高いところに設定されているので、普段ではありえない額の本・ありえない量の本を買う、まさに『大人買い』なわけで、あまり訪れないこのような機会をみんな楽しんでいたように思います。

ブックハンティング前の諸注意（ジュンク堂広島店）

第５回呉高専文化セミナー

図書館長補
岩根 三邦

去る平成19年６月２日（土）、大和ミュージアム４階の会議室において、本校図書館主催による第５回呉高専文化セミナーが開催された。

講師は本校建築学科助教の冨田英夫氏で、演題は「ユネスコ世界遺産を巡るドイツ建築文化の旅」と少し難いものであったが、事前にカラー写真の多用された１２ページにわたる資料が配られ、スライド併用の充実した２時間の講演であった。

講演の趣旨は、氏の表現によれば、ゴシック・ルネサンス・バロックなど社会と共に変化する建築様式の特徴を理解できたら、ヨーロッパの旅はどんなに面白く実り多いものになるだろう、というものであった。そして、世界遺産に興味を持つ旅行者も増えた今日、歴史の流れに沿って（建築様式の順に）世界遺産を巡るドイツの新しい旅が具体的に提案された。

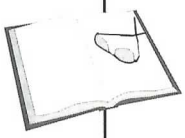
この建築様式順によるドイツの世界遺産の旅は、その時代を代表する建築作品を題材に建築様式の特徴を学ぶことができると共に、時代ごとの建築様式の違いからくる当時の文化や人々の感覚の変化に共感できるという利点を持っているとされた。また、建築様式の変化は、大きくは単純性と複雑性の繰り返しとして理解できると、氏は捉える。

建築作品は、それが建てられた当時の社会や文化の結晶であると考える氏の熱意溢れる講演に、会場満席の受講者は時の経つのを忘れ、実際にドイツを旅した気分であった。講演後は、一般の人や専門家と思しき人からの質問もあり、盛況と言える講演であった。

文化セミナー講演

新任教員の随想 1

骨身に沁みる読書のすすめ



一般科目
（英語）
栗原 武士

「お前は保守的だ」と言われることがある。リベラルを自任する自分としては甚だ不本意なれど、どうやら他人からはそう見えるらしい。畢竟、自らの人となりは他人にはなかなか解ってもらえぬものとみえる。

とはいえ、政治的な保守性はひとまず措くとして、私の読書癖を考えると、これはもう保守以外の何者でもない。私は次から次に新しい本を漁読するよりも、一旦気に入った本があればそれを繰り返し読むのが好きだ。本を一冊読むのにも結構な時間がかかる。さすれば新しい本に手を出してハズレを引くリスクを冒すよりも、気に入った本をもう一度スルメを噛む様により深く味わう方が得策というものではないか。

小学生に入りたての頃は親父殿が買ってきてくれた徳川家康の伝記を繰り返し読んでいた。読みすぎて、どういう訳か自分が「徳川将軍家の直系の子孫」だと勘違いする程だった（なんて嫌な小学生だ）。もう少し大きくなると、灰谷健次郎の『海になみだはいらない』という本をそれこそ諳んじるくらいに読んだし、吉川三国志もセリフを覚える程読んだ。

長じて後はサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』のホールデン少年の語り口に憧れ、村上春樹の『風の歌を聴け』の無口な主人公よろしくビール党になり、あとは、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』などはもう幾度読んだかも定かではない。

事実、今も寝床の枕頭には『竜馬がゆく』の第八巻が伏せて置いてある。成長がない奴だといわれればそれまでだが、司馬氏の文章を読んでいると何やら至極気分が落ち着いてよく眠れるのである。おそらく彼の文章を読みすぎて私の思考回路が彼の文章とシンクロし、結果としてえもいわれぬ安心感が得られるからであろう。つまり司馬氏の思考の流れが私の血肉となったのだといっていい。

我々はものを考えるときに脳味噌の中で日本語の文章を紡いで考えているわけだが、その思考の材料となる文章を我々は他人の文章から借りて来ざるを得ないという点を我々は見落としがちである。真にオリジナルな文章を我々は紡ぐことができない（真に独創的な文章とは他人とまったく共有不可能な意味不明のたわごとに過ぎない）。我々が紡ぐ日本語の文章は、時にそっくりそのまま他人の文章の剽窃であることもあれば、複数の他人による文章を組み合わせたモザイクであることもある。いずれにせよ、我々は自分が独自にものを考えているようでいて、その実、これまで見聞きして自らの血肉となった他人の文章に依存せざるを得ないのだ（当然この文章も、栗原が色々なところからパクってきた文章や概念を組み合わせたものである。あっはっは）。

されば、である。もしあなたが自分の思考の材料を他所から借りてこなければならないのならば、その材料が多ければ多いほどあなたの思考の幅がより広くなるとは思われないだろうか。そこで読書である（ようやく「読書のすすめ」らしくなってきた）。特に他人の文章を繰り返し読むことは、様々な他人の思考をあなたの骨身により深く沁みこませることである。そのことによってあなたは多種多様な視点から物事を見る能力を涵養することになるだろう。複数の視点から物事を考えること、それは一つの考え方に固執せず、柔軟にものを考えることであり、それこそが世間一般で「知性」と呼ばれるものなのである。

そんなわけで、私もまた読書を通じて複数の視点でものを考えている知性的な人間のひとりである。さしあたっては、今夜の飲み会で村上春樹の主人公風にビールをグイグイと行くべきか、いや待てよ、やはりここは坂本竜馬よろしく日本酒を熱燗でキュッキュッとやるべきなのではないか。いやいやサリンジャーのホールデン少年が飲むスコッチ・アンド・ソーダも捨てがたい・・・。こんな具合に複数の視点が私の人格を分裂症的に形成しているお陰で、やはり私の人となりは他人においそれと解ってもらえないようである。

新任教員の随想 2

多読のすすめ

一般科目
（英語）
竹山 友子

みなさん、「多読」を知っていますか？多読とはその名の通り「多くの本を読む」ことです。そして今回私が紹介するのは「英語の多読」です。これは苦行のように難しい英語の本をたくさん読もうということではなく、自分が少しやさしいと思う本や読みやすいと思うレベルの本をたくさん読んでいく方法です。イギリスなど英語圏の子どもたちが最初に読み始める単語しか書いていないような絵本からスタートして、少しずつレベルアップし、すらすらと英語の本を読んでいけるようにする読み方です。

この英語の多読は今年度後期から１年生の授業に取り入れています。上級生のみなさんも、マルチメディア教室後方の本棚にたくさんの英語の本が並んでいるのに気づいていることでしょう。中には実際に本を手に取ってみた人もいるでしょう。この本棚には、キッパーという男の子の家族を中心としたOxford Reading Tree（ORT）やサムという女の子とその友達を中心としたLongman Literacy Land（LLL）などのシリーズの絵本がレベル別にずらっと並んでいます。

このような本を使って多読をする目的は、「英語の本を楽しく読む」ことです。楽しく読むうちに話の流れで英語を理解し、少しずつ速く読めるようになっていきます。そしてそのためのコツ～楽しく読むための３原則があります。

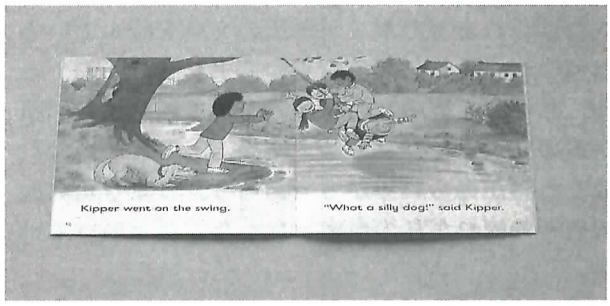
① 「辞書を引かない」
② 「わからないところは飛ばして読む」
③ 「つまらなくなったら別の本へ」

多読の読み方は教科書の読み方とは違います。難しい本をがんばって読む必要はありません。難しい、つまらない、わからないと思ったらすぐに別の本に替えましょう。自分が簡単だと思うレベルの本を「すらすらと速く読む」ことが大切です。

上で紹介したORTとLLLのシリーズはストーリーが楽しい上に英文も読みやすく、授業でとても人気があります。そしてこの２つのシリーズがついに図書館にも入りました。これまではマルチメディア教室内でしか読むことができず、貸し出しも不可でしたが、図書館の本は一般書と同様に好きなときに自由に読むことができます。もちろん貸し出しも可能です。授業でシリーズ全冊制覇ができなかった１年生も、「多読ってどんなものだろう」と思っている上級生のみなさんも、ぜひ図書館でこの２つのシリーズの本を手に取って読んでください。気づいたら英語を読んでいることを忘れて、すっかり物語の世界に入っていることでしょう。

多読図書にはそれぞれその本の語数シールが貼ってあります。できれば自分がそのときにどのレベルの本を何語読んだかなどの記録（日付・題名・レベル・語数など）をノートにつけて、１万語、10万語、30万語と語数をどんどん積み重ねていきましょう。もう英語の本なんか怖くない！Happy reading!!

多読図書の例



Oxford Reading Tree (ORT 3), The Rope Swing

新任教員の随想 3

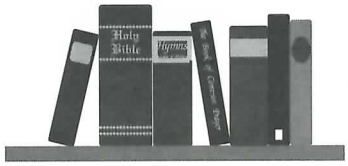
読書のすすめ

一般科目
（英語）
西原 貴之

私は中学生、高校生、大学生の間は本を読むということはほとんどしませんでした。せいぜい、読書感想文が宿題で出た場合とか、レポートを書いて提出しなければならないなど、そういった場合に慌てて読んでいた程度です。当時、僕にとっては本に書いてあることは絶対に正しいことであり、読み手としての私は、ただ書いてあることを鵜呑みにすることが望ましいことと考えていました。このように、読書を読み手にとっては受身的なことと考えていたため、読書はあまり魅力あるものとは思えなかったのです。

ですが、大学院に入って勉強をしている中で、読書には実は様々な形があるということを実感するようになりました。読み手は、本の内容に疑いの目を向けながら読むこともできます。本が書かれた時代背景などを知るために文学作品を読むこともできます。さらに、同じ内容について書かれている本であっても、作者が違えばその内容の語り方も違ってきます。そこで、複数の作者の語り口を比較し、自分はどの作者と近い意見を持っているのか、考えることもできますね。また、ある文学作品の解釈をめぐって他の読者と議論することもあります。このように、読書は読み手の側から働きかけていく積極的な行為です。

今、時代は情報社会です。私たちのまわりには様々な情報が溢れています。この中で私たちは様々なものを読んでいます。本、広告、インターネットのサイト、メモ、手紙、お菓子のパッケージなど、様々なものがありますよね。中には読み手をだまそうとするような文書もあります。私たちは、生活の中で様々な文書を読み、その中から情報を取捨選択していきます。不正な文書にだまされないためには、私たちは文書に対して能動的に働きかけることが求められます。「読める」ということは、自己防衛にも関係していますし、逆に自分にとって利益となることにも関係しています。大袈裟に聞こえるかもしれませんが、読めるということは生活をしていく上でとても重要なことです。



実は本（または文書）に書いてあることは、作者が思っていることの一部に過ぎません。作者はある内容について様々なことを考えていて、それを読み手に少しでも理解してもらうために文章を書くわけですが、作者はすべてを語りつくしているわけではありません。それに、思っていることすべてを言葉にできるわけでもありませんよね（言葉にできない感情やイメージというものもあります）。だから、読者は作者の考えていることを理解するために、様々な推測をしながら読まなければなりません。特に俳句などの形になると、むしろほとんど語られていないと言ってもいいでしょう。このように考えていくと、読書に作者と読み手の駆け引きのようなイメージが湧いてくると思います。読書は作者と読み手のコミュニケーションなのです。

時間をかけて読書できる機会があるときは、ぜひ様々な推測をしながら読んでみてください。そして、作者がどうしてこのような書き方をしたのか、本当はどのような考えを持っているのか、読み手にどのような考えを植えつけようとしているのか、そういったことを考えながら読んでみてください。こうなると、もはや読書はそのイメージである静的なものでは決してなく、とても動的なものになりますね。作者と読み手のゲームと言ってもいいかもしれません。読み手は、このような形の読書をする中で、時として誤読であるとか過剰な読み込みをしてしまうかもしれません。でも、それは練習の一環です。こういった練習をする中で、徐々に読み込みの「さじ加減」のようなものも身についてくるのではないでしょうか。ダイナミックな読書、是非試してみてください。本の余白の部分に、皆さんはどんな事柄（語られなかった内容）が見えてくるでしょうか。

新任教員の随想 4

就職面接も読書から？

環境都市工学科
及川 栄作

10月より赴任しました及川です。就職を考えているみなさんへ送ります。就職は筆記試験が第一で、筆記試験が通れば面接は決ったもの、質問に決まった答えを無難に話せばよい。などと考えてはいませんか？また、面接が苦手でうまく話すことができない。何を話せば良いか分からない。といった面接が苦手な人もいると思います。私も面接が苦手で、こちらへ赴任する前に数々の面接を受けて来ましたし、面接がうまくいかなったところはやはり採用されなかったように思います。こちらへ赴任する際も受けましたが、面接が上手だったのか分かりませんが、今までに受けた面接とは、今回読んだ本の分だけ違った自分を表現することができたから、こちらにお世話になるようになったのかも知れません。そこで、赴任する前に読んだ、面接とはなんだろう？と面接の根本を考えたり、面接力を身につける？ためにしなければならないことを学ぶ本について紹介させて頂きます。この本は梅森浩一氏の「面接力」という本で、市の図書館で借りた本でしたので、今は手元になく、詳しく内容を述べることはできませんが、印象に残った点をいくつか紹介したいと思います。まず、一般的な面接で問われることに、教科書通りに答える問答の例が書かれている本ではありません。著者自らが人事往来の激しい、外資系金融機関の人事部長として経験した、採用者側から見た採用したい人物をどんな基準で選び出すか？という観点から面接について書いてある本です。

面接で重要なことは、聞き手が何を意図として質問しているのか、聞き手の知りたいことは何かを迅速に判断して、対応することができる「対話力」＝「面接力」であると記されています。この対話力はある意味、学力試験結果に勝る、試験成績が良く会社に入ったが、何を会社でやればいいか分からず入社後成果が上げられない人に対して、会社に入った後に自分の成すべきことは何かを迅速に判断して、会社のために即戦力として働ける能力を持った人と解釈できます。このような具体的な対話力は普段から身につけるものであると記載されていたと思いますが、詳しくは一読して見てください。

また、必要最低限の常識的なことを再認識し、例えば面接に対する姿勢として、身だしなみを正して望むこと、なども忘れなく記載されていました。面接の答え方ばかり気にしている人、面接前に一度読んで見てはいかがでしょうか？

ともあれ、加えて私個人としては「私は何としてもこの会社に就職してやる」といった気持ちが一番重要に思います。気持ちから負けてはいけません。何となく良さそうだから、取り合えず先生に進められたから受けてみるか、といった気持ちで受験して、例え採用されたとしても、長続きはせず辞めてしまう結果にもなりかねません。現実的にこのようなプロセスで就職および転職している人が多いように思います。

面接の問答書だけではなく、面接とは何かを考えるこのような本を読んで見るのも面接に受かるために役立つかも知れません。みなさんの健闘を期待します。

コーヒー　ブレイク

前期における図書の貸出回数上位ベスト3

1位：大学編入試験問題　数学／徹底演習

2位：螺鈿迷宮

3位：アキハバラ@ DEEP

1位

2位

3位

新任教員の随想 5

ヒロシマをさがそう

建築学科
八木 雅夫

教員交流により広島県内で生活することになってまもなく、書店でふと手に取った本が「ヒロシマをさがそう」であった。都市計画家、写真家、広島市職員の３人の著者の意図を酌んだ東京神田の西田書店が出版した本である。爆心からおおむね５km 以内にあって原爆投下時から現在まで残る「原爆を見た建物」157 件を被爆の証人として位置づけ、被爆建物を通して原爆被害の悲惨さを世に問うた内容である。まえがきに「被爆者がいなくなったとき、原爆の記憶を後世に伝える力はのこされているであろうか。」との問いかけがなされている。原爆ドームだけではない負の遺産が広島の街中で生きつづけていることについて、私たちに再認識を迫っている。

原爆被爆の認識の風化が言われる時代、伝え方が問われていると感じていた今夏、筆者と同年代の佐々部清監督による映画「夕凪の街 桜の国」が公開された。舞台となった広島県内での上映は、全国に先駆け一週間早い７月 21 日となり、初日に広島市の緑井にあるシネマコンプレックスで鑑賞した。緑井まで出かけたのには訳があった。実は、このシネコンを明石高専で筆者のゼミを巣立った卒業生が設計していたからである。

同名の原作は、広島市出身のこうの史代が漫画本として発表した作品で、平成 16 年度文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞を受賞している。昭和 33 年の広島市内基町界隈を舞台にした前半では、やがては原爆症で亡くなってしまう、被爆体験を忘れられない女性、皆実の日常が描かれる。後半では皆実の弟である父の行動を追い、伯母の残した想いを知っていく娘＝七波が描かれ、二人の女性を通して、平和の尊さと生きることの喜びが実感として浮かび上がるストーリーで展開する。映画「Always 三丁目の夕日」で描かれる昭和 33 年と、ぜひ比較してほしいと願っている。

図書館も多様なメディアへの対応が基本機能とされる時代を迎えた。「夕凪の街 桜の国」も漫画本、映画、ノベルズ版で情報が発信されている。身近な環境の中で、こうした作品に触れる機会を求めてほしい。

山下和也、井手三千男、叶真幹 (2006)「ヒロシマをさがそう－原爆を見た建物」西田書店
こうの史代 (2004)「夕凪の街 桜の国」双葉社

原爆を見た建物の一つである旧日銀広島支店

DVDの活用について

図書館長
機械工学科
野原　稔

図書館においては、本のみでなく少し前に公開された映画等のDVD化されたものを備えています。 学生は、図書館でこれらのDVDを鑑賞することができ盛んに利用しています。 これまでにNHKで放映された”プロジェクトX”等の教養を高めると思われるDVDも備えていますが、これらの鑑賞は少ないようです。これらのDVDは、放映時間も50分と比較的短いため、特別活動や授業等での利用が考えられます。表1は、図書館に備えてある”プロジェクトX”のタイトル一覧を示しています。表1に示すNO.38とNO.43のタイトルについて授業で鑑賞させ、その感想文を書かせたものの一例を掲示しました。感想文によりますと、DVDの鑑賞により何らかのインパクトがあるようです。

何れかの機会を利用してDVDのご利用をお願いいたします。

表1　”プロジェクトX”タイトル一覧

No	タイトル	No	タイトル	No	タイトル
1	巨大台風から日本を守れ	26	逆転　田舎工場　世界を制す	51	魔の山大遭難 決死の救出劇
2	友の死を越えて	27	絶対絶命　６５０人　決死の脱出劇	52	日米逆転！ コンビニを作った素人たち
3	ガンを探し出せ	28	炎のアラビア　一発必中　油をあてろ	53	世界最大の船 火花散る闘い
4	世界を驚かせた一台の車	29	起死回生　アラビアの友よ	54	衝撃のペルー 男たちは生き抜いた
5	執念が生んだ新幹線	30	レーザー 光のメスで命を救え	55	爆発の嵐 スエズ運河を掘れ
6	海底ロマン！深海6500mへの挑戦	31	魔法のラーメン ８２億食の軌跡	56	執念のテレビ 技術者魂３０年の闘い
7	厳冬　黒四ダムに挑む	32	謎のマスク 三億円犯人を追え	57	太平洋１万キロ 決死の海底ケーブル
8	翼はよみがえった１	33	アンコールワットに誓う師弟の絆	58	桂離宮　職人魂ここにあり
9	翼はよみがえった２	34	王が眠る 神秘の遺跡	59	復活の日　ロボット犬にかける
10	妻へ贈ったダイニングキッチン	35	炎を見ろ 赤き城の伝説	60	日本初のハイウエー　勝負は天王山
11	東京タワー　恋人たちの戦い	36	ゆけチャンピィ 奇跡の犬	61	駅伝日本一　運命のたすきをつなげ
12	ツッパリ生徒と泣き虫先生	37	決断 命の一滴	62	醤油　アメリカ市場を開拓せよ
13	よみがえれ日本海	38	国産コンピューター ゼロからの大逆転	63	プラズマテレビ　愛の文字から始まった
14	町工場　世界へ翔ぶ	39	運命のＺ計画	64	衝撃のカミオカンデ　地下1000メートルの闘い
15	奇跡の心臓手術に挑む	40	わが友へ 病床からのキックオフ	65	家電革命　トロンの衝撃
16	男たち不屈のドラマ　瀬戸大橋	41	制覇せよ 世界最高峰レース	66	食洗機　100万台への死闘
17	えりも岬に春を呼べ	42	桜ロード 巨木輸送作戦	67	大阪万博　史上最大の警備作戦
18	運命の船「宗谷」発進１	43	男たちの復活戦 デジタルカメラに賭ける	68	湯布院　癒しの里の百年戦争
19	極寒　南極越冬隊の奇跡２	44	幸せの鳥トキ 執念の誕生	69	われら茨の道を行く～国産乗用車攻防戦～
20	液晶執念の対決	45	家電元年 最強営業マン立つ	70	１００万座席への苦闘～みどりの窓口・世界初鉄道システム
21	耳を澄ませ赤ちゃんの声	46	救命救急 ER誕生	71	不屈の町工場　走れ　魂のバイク
22	日本初のマイカーてんとう虫　町をゆく	47	料理人たち 炎の東京オリンピック	72	毛利飛行士　衝撃の危機脱出～技術者たちの総力戦～
23	霞が関ビル　超高層への果てなき闘い	48	運命の最終テスト	73	ロータリー４７士の闘い～夢のエンジン 廃墟からの誕生～
24	炎上　男たちは飛び込んだ	49	革命トイレ 市場を制す	74	新羽田空港　底なし沼に建設せよ
25	通勤ラッシュを退治せよ	50	突破せよ 最強特許網 新コピー機 誕生	75	ラストファイト　名車よ 永遠なれ

国産コンピューター ゼロからの大逆転

No.38

～日本技術界　伝説のドラマ～

機械工学科５年
真野　正徳

「挑戦者に無理という言葉はないんだ」「全ての開発は感動から始まる」池田敏雄さんのこの言葉に技術者としてのプライド、技術者の本質というものを感じました。当時、コンピューターの技術はほとんどなく、クズとまで言われたメーカーが世界シェア一位の会社ＩＢＭを超えるコンピューターを開発するまでには、本当に計り知れないほどの困難があったのだと思います。事実、他のメーカーや会社の上司、重役などほとんどの人があきらめてしまうほど、巨像と言われたＩＢＭの存在はとてつもなく大きなものでした。そんな会社を超える事ができたのには、やはり才能だけではない何かがあったのだと思います。確かに池田さんは小

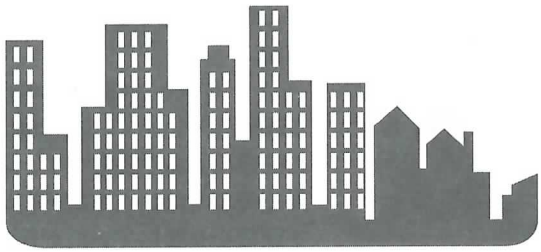
さい頃から数学が得意で、数学の才能があったのかもしれませんが、その一人の才能だけでコンピューターというものはどうにかできるようなものではないと思います。私は、その何かというのが、上に書いた様な言葉に表れている池田さんの技術者としてのプライドだと思います。また、そんな池田さんの周りにたまたま集まった上司や部下の方々などの環境というのもあると思います。それらが一つの場所に集まって、初めてそういった成果など形として表れたのだと思いました。

私は、このビデオをみて、技術者とはどういったものか、技術者とはどうあるべきかというのを考えさせられたと思います。上に書いた言葉のように、常に挑戦していけば無理な事なんてない。物をつくり上げて形にした時の感動があるから開発をするんだという気持ちや、「発想は思い付いた時が勝負」というように、ずっと考えていて、ふと日常で思い付く事があったら場所など関係なくとにかく確認してみる。今、すばらしい発想が出たら、それはすぐ忘れてしまうものだからといってすぐに図面を開いてみるといった事は、私がこれから技術者になっていく中で、見習っていかなければならない部分だと思いました。今回、こういった事を考えさせていただく機会を与えて下さってありがとうございました。

男たちの復活戦 No.43
デジタルカメラに賭ける

機械工学科４年
須々木　達也

末高さん達はバブルに電子カメラを開発した。しかし、ソニーの商品に負け、バブルの時代に売れない商品をつくってしまった。そのため、会社は大打撃を受けチームは解散させられた。会社には身の置き場がなく、何もしないで過ごす日々が続いた。しかし、他のライバル会社の人達と勉強会を開いたり、話し合いをすることで再びカメラをつくることを決心した。デジタル化することで小型化しようと考えた。末高さんは前のメンバーと闇研をすることにした。しかし、大きな問題があった。それは会社に費用の申請ができないため、高精度、高性能の部品が使えないということだった。結果、デジタル化すれば小型化できるはずなのに、逆に大きくなるという事態になった。また、この試作品には重大な欠点が二つあった。それは、３キロもあること、また、手で持てなくなるくらい熱くなることである。それゆえ、熱子、重子という皮肉な名前がつけられることになった。この問題を解決するため、末高さん達はポケットテレビにカメラの機能を追加するという名目で予算を手に入れることに成功した。そして、その予算で集積回路などの部品をつくり、ついに小型化のデジタルカメラを完成させた。このビデオをみて、人間は一人で生きていけないということをあらためて感じた。末高さんが最初の開発で失敗した時、はげましてくれたのは、他のライバル会社の人であるし、いろいろな困難な問題を解決するために、助けてくれたのも人である。そして、何より、一人でデジタルカメラを開発したのではなく何人もの仲間と一緒に開発したからだ。末高さんは、ものづくりの何が楽しいかと聞かれれたとき、一つ一つの部品ではたいして役に立たないけど、それがたくさん組み合わされることで大きな役割を果たすからだと答えた。「一つ一つの部品ではたいして役に立たないけど、それがたくさん組み合わされることで大きな役割を果たす」ということは人間においても同じではないだろうか。それは人間一人一人の力はたいしたことなくても、それが積み重なることで大きな仕事をするからだ。大きな仕事とは歴史を残すことである。今回このビデオを見てたくさんのことを考え、自分を高めることができた。



DVD 利用回数上位８位

前期における利用回数の多い１位、２位、３位のジャケットおよび１～８位までのDVDのタイトルを表２に示します。

１位： ピタゴラ装置
ＤＶＤブック①

２位：タイヨウのうた

３位：硫黄島からの手紙

表２　DVD 利用回数上位８位

順位	タ　イ　ト　ル	順位	タ　イ　ト　ル
１位	ピタゴラ装置ＤＶＤブック（1）	５位	ハリーポッターと炎のゴブレット
２位	タイヨウのうた	５位	時をかける少女
３位	硫黄島からの手紙	５位	プラダを着た悪魔
４位	ピタゴラ装置ＤＶＤブック（2）	８位	手紙

お　知　ら　せ

学年末休業中の長期貸出

右記のように、長期貸出を行ないます。貸出中の図書は、継続手続（１回だけ可）を行なえば、長期貸出の扱いとなります。

貸出期間	１～４年生　２月15日～３月21日 専攻科１年　２月　６日～３月21日
貸出冊数	５冊以内（雑誌は除く）
返却期限	４月７日　厳守

延滞図書返却について

貸出期限が過ぎて督促しても一向に返さない学生がいます。皆が利用する本です。紛失したら図書館までご連絡ください。弁償していただきます。３月卒業予定者は、期限までに必ず返却してください．

編集後記

今回の「図書だより第４７号」は、いかがでしたか？　「図書だより」を読んで、「今度はこの本を読んでみようかな」、「図書館へ行ってみよう」と思う方々が増えると嬉しいですね。

１１月から、「話題の本」のコーナーが新聞棚の横に移設され、本の表紙が見えるように配架しています。これは、総合教育技術室（機械系担当）技術専門職員の佐々木さんのご好意による手作りです。よりよい図書館をめざして日々工夫していますので、本を読む人もそうでない人も是非おいでください。最後に、今号の発刊にあたりご多忙にも関わらず原稿を執筆していただきました方々に心からお礼申し上げます。　　（図 書 館）